

ホトトギス

昭和二十六年一月二十一日発行
今刊二巻一月一日発行
今刊二巻一月一日発行
今刊二巻一月一日発行

ホトトギス

一月号



風雅の小筥〔二十四〕

廣太郎

第二次世界大戦後、いわゆる現代仮名遣いや当用漢字や常用漢字等、日本語の漢字や仮名遣いが大幅に変った。私は戦後生れなので、歴史的仮名遣いや正字の教育は受けていないが、昭和五十七年にホトトギス社に入社すると、当時のホトトギスは未だ歴史的仮名遣い、正字を使用していたのでかなり違和感があった事を思い出す。人から聞いた話であるが、高濱年尾が虚子の時代を全く踏襲していた事や、年尾自身「新仮名や当用漢字、常用漢字は間違いだ」と豪語していたという話も聞く。どこまで信用出来るかは別にして、確かにある年尾の一番弟子の御一人とも言える当時のホトトギス編集長松尾緑富氏も頑として歴史的仮名遣い、正字を変える事には反対されていた。そんな中、やはりそれでは若い人が文字を解する事は難しいだろうという事で、読者の意見も参考にしながら平成元年八月号から当時の稲畑汀子主宰の大英断で文章に関しては常用漢字、新仮名遣いを基本的に使用するという方針に転換した。俳句に関しては歴史的仮名遣いや正字をそのまま踏襲していたが、印刷の関係もあり、平成五年一月号からは俳句についても漢字は常用漢字、ただし常用漢字に無い字に関しては、そのまま正字を使うという方針になり現在に至っている。あらためて平成元年七月号以前のホトトギスを繙いてみると、確かに文章に関しては、ひよつとするとこれは若い人には読んで理解するのはちょっと難しいのではないかというような箇所もあるが、少し懐かしさも感じる。

旬日記 汀子

平成三十一年一月 朝日新聞新春詠

体調を取り戻したる初御空
馳足を止め一歩づつ明の春
生き急ぐことなき一歩初明り

一月五日 芦屋ホトギス会

生きてゐることが感謝の雪の朝
生も死も逢ふも別れもある年賀
生きてゆくこと美しき年賀かな

一月六日 下萌句会

癒えし身の病む人見舞ふ年賀かな
年賀とも見舞ともその何れとも
病みしこと忘るることも三ヶ日
人数の揃へば雑煮配らるる

一月七日 ロイヤル俳壇

まゆ玉の掛けあるロビー抜けて来し
年賀よりいつもの授業はじまりぬ
宝恵籠のあるロビー又通りけり
初句会いつもの顔の揃ひけり

一月八日 大阪倶楽部

生きてゐしこと心にも年賀かな
刻々といふ命あり寒牡丹
一枚の絵を抜け出して来し春著

人の世の時間の外にゐし春著
色明かしはじめたるより寒牡丹
人の世の喜怒哀楽の年明くる
明暗の色のはじまる寒牡丹

一月八日 綿葉倶楽部

去年今年なく体調に心して
今日よりは元の一人や松の内
正月に集ひしことも家族かな
年賀述べいつもの日々のはじまりし

一月十日 清交社

初恵美須この渋滞の先にあり
正月の集ひ一番乗りの客
宝恵籠を見送り来しと現はるる
揃ふことすなはち年賀心かな

一月十五日 有恒俳句会

新年を祝ふことより会となる
一日もおろそかならず年迎ふ
体調になほ心して松の内
寒牡丹やうやく人の歩を誘ふ

一月十五日 無名会

一月も半分過ぎてしまひけり
星博士より今年又初暦
花束は米寿の祝ひ冬の薔薇
庭師来て焚火の用意客設

一月十五日 無名会

松過のいつもの日々のはじまりし

正月の花に埋まりてゐる米寿
寒鴉帰宅の時を知つてをり
過信してならぬ健康冬の草
冬の草午後より雨といふ予報

一月十六日 夏潮句会

恒例のどんどの用意して待ちぬ
又一人入院の沙汰寒に入る
初句会とてさまざまな趣向あり
雪深き地より来られし友迎へ

一月十八日 アネモネ句会

健康に勝るものなし初句会
あるがまま生きて行く日日月の春
雪の沙汰訃報加はりたることも
悲しみの深かりし夜の雪いかに

一月二十四日 きさらぎ会

祝はれし米寿加はる初句会
健康を問はるることも初電話
島を訪ふ日の待たるるも野水仙
この部屋に水仙の香の活けらるる

一月二十五日 時雨句会

冬雲の増えゆく午後となる家路
健康を取り戻したる寒さかな
雪国の雪の深さを問ふことも
入院も家居も寒さなかりけり

廣太郎句帳

廣太郎

平成三十一年一月五日 芦屋ホトギス会

免許証返納と決め初笑

初孫の懐妊告げる年賀かな

故郷の山に抱かれ三ヶ日

富士の雪伊吹の雪を越え句座に

一月六日 野分会芦屋例会

寒牡丹狭庭の隅といふ天地

一月六日 青嵐会芦屋例会

寒の水君の唇奪ふほど

一月十日 土筆会

冬の草住宅街といふ気品

小寒に一枚羽織る恙かな

冬草に明日てふ未来ありにけり

森点す千両ほどの輝きに

一月十三日 高濱年尾先生を偲ぶ初句会

変幻の富士雪纏ひ雲纏ひ

天国へ旅立ちさうな雪の富士

暇めく冬雲富士を閉ざしゆく

ロープウエー行く枯木立撫でながら

寒の水一杯に湧く旅心

初旅の余韻西へと東へと

心眼に富士肉眼に霧氷林

一月十三日 十四年寿会

ワイナリー冬芽宿してがらんどろ

春隣今宵も牛の生き血酌み

海といふ夢のまほろば春近し

寒の海水平線を曖昧に

一月十五日 北國文芸選考吟

災を遠ざけてある初明り

一月十六日 蕉心会

言ふことを絶対聞かぬ人寒し

松過のあなた何かが変わりゆく

心まで冷たくなつてゆく恙

サクスの音色橋より春近し

蕉像に来て寒風の千切れ飛ぶ

山茶花の散る魂の枷を解き

万両の一両づつを磨く風

病気ではないと言ひ張り冬籠

一月十七日 登高会

老の春無理をすなど言はれても

大鶯声姦ししく初雀

初鴉病窓過る速さかな

摩天楼輪郭仄と初明り

故郷は目覚の早し初景色

乗初を終へて免許を返納す

門松に景改るオフィス街

一月十八日 廣邦会

開国の哀史を秘めて野水仙

若水を汲む新妻といふ矜持

何もかも好きにさせてと去年今年

一月十八日 前議員句会

御降の輝きとして庭の景

臘梅や坂緩やかになつてゆく

漆黒の闇を統べゆく冬薔薇

一月十九日 野分会東京例会

阪神忌四半世紀を目前に

電飾に思ひは一つ阪神忌

電氣ある水ある暮し阪神忌

一月十九日 青嵐会東京例会

春近き芝の弾力ありにけり

探梅に叶ふ都心の一古木

一月二十一日 朝日カルチャー若草句会

君の首このマフラーで絞めたくて

初景色一秒前の過去を捨て

マフラーを取りて司教となりゆけり

その中に紅を加へて初景色

一月二十二日 若水句会

街を舞ふラガー地を這ふボールかな

臘梅の香に決めかねてある恋路

君が居るだけで心は避寒かな

弾かれしラガーに風の集まり来

臘梅や日輪有情雨無情

臘梅の香に傾いてゆく日差

一月二十三日 目黒学園句会

教皇の来日近し鐘冴ゆる

寒椿葉隠れといふ華やぎに

一月二十四日 梅花祭選考吟

梅が香に寄す詩心と旅心

一月二十八日 天地の会新年句会

乗り継いで乗り継いで湖春隣

白銀を借景として寒鴉

一月三十一日 静の会

山の黙海の騒ぎに春を待つ

象の鼻麒麟の首も春を待つ

雑詠 廣太郎 選

夕焼空海より広く見せて消ゆ 熱海 嶋田一步
 海夕焼高き広きがすぐに消え 同
 海夕焼山夕焼となりて消ゆ 同
 津波跡しるき山内露けしや 長岡 安原 葉
 松島の津波露けく語らるる 同
 松島の松みな美しき秋の雲 同
 一力に酔ふも一興夏芝居 神戸 和田華凜
 割烹着どこか懐し衣被 同
 別るるは坂終るとき風の盆 同
 秋灯の深きより山村宗家 同 立村霜衣
 舞ふ二人その手から手へ秋の風 同
 舞扇いま秋蝶として羽撃つ 同
 梅雨蝶のとまりて重き一枝かな 熊本 岩岡中正
 一本の棒のごとくに病みて夏 同
 銀漢に仰臥とは祈りのかたち 同
 日の出よりも始まつてゐる残暑 神戸 山田佳乃
 北国の水青き池星迎 同
 台風の透けてビニール傘斜め 同

嫌ひでも好きでもけふも五月雨るる 相模原 木村享史
 まいにちを遺影とだけの梅雨籠 同
 七十年導かれ来し書を曝す 同
 森のなき文化の森にきて秋思 東京 大久保白村
 鳴き移る龍子旧居の法師蟬 同
 秋の蚊に我が福耳を狙はるる 同
 夕焼の消えていつもの夜となる 龍ヶ崎 今橋眞理子
 次々と闇新しく花火かな 同
 皆影となりて花火の夜を帰る 同
 梅雨明けて別の心となりけり 福山 竹下陶子
 武の神に近づく茅の輪くぐりけり 同
 大声の蟬にくぐるや盧舎那仏 同
 海の日の見ゆる窓見えぬ窓 渋川 木暮陶句郎
 太陽を小さく宿し大茄子 同
 万緑の隙間は星のかたちして 同
 少しづつ冷たさ降りて来る波止場 東京 今井肖子
 あいさつをちひさく交はし雪もよひ 同
 枯芝や大棧橋に木のぬくみ 同
 はや彼女つくつく法師聞き留めし 神戸 後藤比奈夫
 娘の啖呵涼し父に向け夫に向け 同
 摩耶山に四万六千日詣で 同
 澄む水に絡まる水も澄んでをり 香川 湯川 雅
 宵闇や街の灯遠き門を鎖す 同
 黙に黙返し並びぬ秋の人 同

雑詠句評（十二月号より）

書架高く置く虚子の書は徴びさせず

相模原

木村享史

花鳥諷詠を掲げるホトトギスの俳人達にとつて、虚子は永遠の師である。ことに直接教えを受けた作者には特別な思いがある事だろう。虚子が亡くなった後も、その教えは虚子の書の中に生きているのだ。大切なその書は本棚の高い所に納め、度々開いては自分の俳句の指針としてるのであろう。虚子の書もその中の虚子の教えも決して徴びることはないという信念と、徴びさせてはならないという気概が一句からひしひと感じられる。本当の師弟とはこういうものなだろう。（紀子）

直接虚子に師事された作者にとつては、やはり虚子の書は聖書にも匹敵する大切な書物で、書棚の一番高い場所に保管されているのだ。そして何よりも季節になると徴に気を付けなければならぬ。何か虚子が実際作者の目の前に居るような雰囲気伝わってくる。愛情深い句である。（廣太郎）

リハビリの骨の鳴る音汗涼し

神戸

千原叡子

汗には冷や汗のように精神的な緊張などによって出る汗もあるが、季節としての汗は夏の暑さによって出る汗であつて、あまり好感の持てるものではない。しかしこの句からは汗の嫌らしさが微塵も伝わって来ないのである。

作者は目下入院加療中でリハビリに専念されておられると聞いている。骨の鳴るほどの痛み辛さをリハビリで味わっているのであるが、「汗涼し」の涼しによつて、見事なまでに爽やかなリハビリを想像させてしまっている。

また作者は、私の自分史に様々な感想をお寄せ下さった方でもあり、一日も早い全快を祈念したい。（紀元）

リハビリというのは筆者には察して余りあるものがあるが、壮絶な苦しみがあるという事も聞いた。そんなリハビリをしている人の壮絶な姿を却つて明るい季節で詠むのは難しい事だろう。それを自然に詠む作者の優しい心持ちが美しく伝わってくる。快癒を祈るのみである。（廣太郎）

天地有情

眠るとは命短くさせて秋
 俳句とは吾の秋の夜を長くして
 秋暑くとも健やかにつどはれし
 津波跡まだありありと秋の蟬
 涅槃西風日本列島黄に染めて
 外つ国へ宇宙への旅蝮の道
 暑し暑し机辺いつまで片付かず
 目の前のもの見えざる暑さかな
 話しかけみても遺影よ梅雨に倦む
 夏帽子買ふにも妻のみなければ
 炎帝や老爺の寿命縮めしか
 炎天に予約の検診人まばら
 流灯に昔の波の寄せて来る
 流灯に遠ざかりゆく父も母も
 ひぐらしや上りケール客絶えて
 露けしや文化財なる祖の墓
 颯風の心の隙間吹き荒ぶ
 街川の螢火とんで来しことも

熱海 嶋田一步
 同
 長岡 安原 葉
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 神戸 後藤比奈夫
 同
 相模原 木村享史
 同
 東京 河野昭彦
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 神戸 三村純也
 同
 福山 竹下陶子
 同

指輪なく涼しく淋し薬指
 としよりの日と呟いて窓を開け
 半生を語る先生爽やかに
 水都けふ月の都となりしかな
 蛸や妻が門辺で待つてをり
 蛸ややり残すこと多かりし
 音の無き音のはじける稲の殿
 停電の収まり遠き稲光
 秋立ちて二日目となる空の色
 盆近くぼつぼつ子らの来る頃か
 睡蓮の離れ離れの白さかな
 復興の町に上がれる盆の月
 夕空へ星を灯せる聖樹かな
 校庭にみんなのクリスマスツリー
 虚子記念文学館に学ぶ蠅
 武具飾る吉野も奥の蔵座敷
 吾亦紅顧みることもはや無し
 月光は高きところにもあり

東京 今井千鶴子
 同
 神戸 和田華凜
 同
 同 浜崎素粒子
 同
 同 千原 叡子
 同
 吹田 大橋 暁
 同
 同 同
 仙台 赤川誓城
 同
 東京 今井肖子
 同
 同 大久保白村
 同
 同 同
 群馬 中杉隆世
 同

虚子選